

ルート2027 恋愛ルート

アズマケイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ルート2027（本宮ジュンに憑依）恋愛ルート。それぞれ独立したルートでありオムニバス方式。なお本編に関係はありません。

目次

ヤマト編	1
ヤマト編 2	12
太一編	23
太一編 2	35
太一編 3	44
太一編 4	54
一乗寺治編	68

ヤマト編

それは夏休みのことだった。

「ただいまあー！」

「あら、おかえり、大輔」

「なあなあ、姉ちゃんは!？」

「ジユン? ジユンなら部屋にいるんじゃない?」

「わかった、ありがとう！」

脱ぎっぱなしの靴を放り出した大輔は、ランドセルを自分の部屋に放り込むやいなや、ばたん、と乱暴にドアをしめる。そして、どんどんどん、と真向かいにあるジユンの部屋のドアを叩き始めた。おーい、姉ちゃん、ちよつと! つてジユンと呼ぶ大輔だったが、ジユンの部屋からは返事がない。騒がしい大輔を見かねて、おやつの準備を始めたお母さんが、こーら、とリビングから声をかける。

「大輔、うるさい。静かにしなさい」

「だつて姉ちゃんか。なあ、どつか遊びに行った？」

「そんなわけないでしょ、今日も一日うちにいたわよ」

「えー、じゃあなんで返事しないんだよー」

「またパソコンしてるんじゃない？」

「えー、また？」

「百恵ちゃんに頼まれたみたいだしねえ。まあ、いいわ。入っちゃいなさい、大輔。どうせ鍵かけてないわよ」

がちや、つてドアノブを回すと、あつさり空いてしまった。思わずお母さんを見た大輔に、ほらね？つてお母さんは笑った。おやつだから、ついでに呼んできて、つて言われた大輔は、はあい、つて返してドアを開けた。ねえちゃん、つて呼びかけてみるが、パソコンの前にいるジュンは全然気づいていないようだ。

相変わらず、女の子の部屋とは思えない空間が広がっている。まるで物置みたいだった。小学校の頃から使っている勉強机、洋服ダンス、カーペット、たくさんの本がおいてあるラック、は隅の方に追いやられている。ジュンがいるのは、部活で使うという名目で集められたパソコンや電子機器が並んでいるところだ。

これがほとんどのスペースをとっているため、まるで物置のようになってきているのだ。

ノートパソコンにコードを繋ぎ、なにかの機械とつないである机の前に、ジュンは座っていた。ヘッドホンをあて、音漏れしない程度の音量で作業用BGMを流しながら作業をしているジュンである。

音楽を聴きながらの方が作業がはかどるため、ジュンは集中したいことがあると、どこかの動画が無料素材サイトで拾ってきた音楽を流しているのだ。近づいてみると、いくつものウィンドウを並べて、難しい顔をしてキーボードを打ち込んでいた。キーボードには目もくれない。ブライントタツチである。

相変わらずなにをしているのか、よくわからない。でも、こういう時のジュンが一番生き生きしていることを大輔は知っていた。基本的に、こういう時のジュンは、何があっても反応がない。それだけ自分の世界に入り浸っているのである。

「ねえちゃん、ねえちゃん」

とんとん肩を叩くと、ヘッドホンを当てたままのジュンがこちらを向く。ああ、おかえり、と口パクが笑う。おやつは？つて聞くと、口の形で判別したのか、あとで、つて言いながら作業に戻ってしまった。とんとん肩を叩くと、なに？つてまたこつちを見る。ちよつと話が、つていうのに、あとで、つて言いながら目はディスプレイに泳いで

いる。

「どうやら作業に集中したいようだ。ヘッドホンを外そうと手を伸ばすと、こーらつて笑いながら耳元を防衛されてしまい、埒があかない。お母さんにいつといて、つてヘッドホンをしているせいか、随分と大声な返事をされてしまい、作業に戻ってしまった。」

「あーもう、なんだよ。ちゃんとチビモン置いてきたのに」

大輔はためいきである。3年前、太一たちと知り合ったことで、ジュンはデジモンを知っている。だから大輔がチビモンを連れて帰ってきた時、それを隠すのは京や伊織より楽だった。あー、今度はアンタが選ばれし子供なんだ？まあがんばんなさいよ、つて肩を叩かれながら笑われただけだ。お風呂に入れたり、夕御飯や朝ごはんを準備したり、それとなくフォローしてくれるのは感謝している。

何があったのか基本的に聞かないスタンスである。どうせアンタはなんにも言わなくてもやってくれるでしょ、つてよくわからない信頼のもと、好き勝手させてくれる居心地の良さは今なお健在だ。そんなジュンからの注意はたったひとつ、ぜえつたいにアンタのデジモンをアタシの部屋に入れないでよねつてことだけである。デジモンが近くにいとパソコンが壊れる。

近くにある付属機が壊れる。パソコン部や演劇部で必要なものがブツ壊れたらえらいことになる。光子郎のパソコンのように、デジモンの発する電波に対応していないのだ、と言われた。うそつけ、うそを。3年前からそれをしてるジュンがなんの対処もしないわけがない。現に東京は世界有数の電波障害対策都市になったのだ。

ついでにそういう商品もバカ売れしてはや3年である。結局、チビモン禁止令の理由は謎のままだ。だいしけのねえちゃん、おれのこときらいなのか？つて不安そうな顔をするチビモンに、そんなこといつてないでしょ、つてほっぺたをフニフニしながら笑ったからデジモン嫌いはない。D3を興味津々で取り上げられてしまったのを見ると、尚更。

光子郎とアメリカのハーバード中学生の研究結果をメールでやり取りしている位には、興味津々だった。いまいちわからない大輔である。まあ、そんなことはどうでもいい。今大事なのはジュンと会話することだ。12年間同じ屋根の下で暮らしてきた大輔は、こういう時の対処法をよく知っている。

大輔はヘッドホンについている音量メモリをスライドさせた。ジュンの体がびくつと震えて、女の子とは遠い悲鳴が上がる。ミュートにするつもりだったのに、最大音量にしたのだ。大輔は、ミュートに戻す。たまらずヘッドホンを外したジュンは、耳鳴り

がするのか、頭痛がするのか、涙目で耳元を抑えている。声にならない悲鳴を上げてうずくまっているジyunは、なにすんのよおって震えていた。

「姉ちゃんが悪いんだろー」

「だからってこれはないでしょ、アンタねえ。あーもう、耳痛い」

「主電源落とすよりマシだろー」

「やめて、マジでやめて、ブルースクリーンはいやあつー！」

「元氣そうじゃん」

「もうなれたわよ、誰かさんのせいでー」

「姉ちゃんが悪いんだろー」

「わかったわよ、もー。なに？」

はあ、つてたためいきをついたジyunは、ようやく耳鳴りが収まったのか大輔を見上げる。

「今日さ、ヤマトさんが来てくれたんだ」

「珍しいわね、アンタがそっちの話すんの」

「まあなー」

「へー、よかつたじゃない。まあ、最近ようやく落ちついた感じ？え、なに？それだけ？」

「……やっぱ違うよな」

「なにがよ？ちよつと話が見えないんだけど、大輔？」

うーん、じゃあなんで、つてひとりごとをつぶやきながら考え込み始めてしまった大輔に、ジyunは疑問符を飛ばす。だいすけー？つて言われて我に返った大輔は、ちよつと待つてくれよつて言いながら部屋を出ていく。そして、何かを持って帰つてきた。

「これ」

差し出されたのは、コンサートのチケットだ。

「京ちゃんから渡されたの？百恵から？」

受け取つたジyunは、あー、つて苦笑いした。ヤマトの所属するバンドのチケットだったのだ。

「見にこいって誘われたの？たいへんねえ。せつかくだから光ちゃんといってみたら？」

「ちがうよ」

「え？なにがよ？チケツト余ったから配ってんじゃないの？」

「違うって。ヤマトさんから預かったのは、これだけだって」

「じゃあなんでその一枚をアタシに渡すわけ？」

「ヤマトさんに頼まれたんだよ」

「……ちよつと待ってよ。この日は演劇部の合宿があるから無理だって、断れって言ったじゃない」

「ヤマトさんと千恵さん、同じクラスなんだよ！百恵さんから、そんなのいって筒抜けだってのー！」

「百恵の裏切り者ーっ！」

「え、なに、ヤマトさんとねえちゃん、付き合ってるの？それともヤマトさんの片思い？別れ話になってるとか？いくら誘ってもこないからって頼まれたんだけど」

「ちよつと待ちなさい、大輔。いくらなんでも、話が飛びすぎよ。アタシとヤマトくんが？そんなわけないでしょ」

「うそつけー。じゃあなんで、あのヤマトさんが、絶対だぞって念押しすんだよ、わざわざ俺だけ呼び止めて、みんながいなくなったあとで、こつそり渡すんだよ。ぜったい何かあるだろ、ふつう!」

「だから違うって言うてんでしょうが。落ち着けっつーの」

「じゃあ、なんでヤマトさんが姉ちゃんにチケット贈るんだよ」

「あーもう、だからやだったのに!」

はあ、つとジユンは盛大にため息をついた。

ヤマトのバンドがバンドの方向性を知ってもらうため、サンプル音源を収録したデモテープもどきをつくることになったのが始まりだ。パソコンを扱える人間がいないなら、カセットテープでいいはずだ。でもやっぱりカッコ悪いからCDやMDを使いたいらしい。

不幸にもお台場中学校にはパソコン部があり、1年生ながら部長を任された光子郎がいる。パソコンが使える人間がいないか、と頼まれたヤマトは、真つ先に光子郎や京が思い浮かんだが、無理である。そこに目をつけたのが、ヤマトとお近づきになりたい、ミーハー気質の井ノ上家次女である。たまたま同じクラスだった彼女は、こつそり百恵おねえちゃんに相談する。

ヤマトのバンドもチェックしていたアイドル愛好家のお姉ちゃんが食いつかないわけがない。ぐるりと回って、知り合いのバンドが困ってる、という触れ込みで連れてこられたジューンは、ヤマトと鉢合わせしたというわけだ。ここでヤマトと知り合いだとはばれてしまったジューンは、井ノ上姉妹からヤマトのバンドに連れてけと圧力をかけられることになる。

一応、頼まれたし、知り合いのよしみで、つて引き受けたジューンだったが、うっかりヤマトのバンドメンバーに、デモテープの技術を気に入られてしまったのである。今後とも宜しく、つていわれてしまい、忙しいからと逃げ回っているというわけである。めんどくさいことは相変わらず嫌いなジューンである。

「姉ちゃん、夏フェスとか好きじゃん。ヤマトさんのバンドも手伝えば？」

「やーよ、興味ないもん。R & a m p ; Bとか古すぎ」

「あーるあんどびー？」

「リズム・アンド・ブルースの略よ。ローリング・ストーンズとかアニマルズとか50年代にアメリカで流行ったジャンルだね、ヤマトくんのやつてるバンド、ほんとはそっち方面行きたいんだって。今の子達わかんないでしょ、絶対」

「なんで姉ちゃんしつてんの？」

「ハマってるわけじゃないわよ。こういうことするときには、洋楽を聞くって決めてるの。邦楽だと歌詞が気になっちゃって作業になんないでしょ。だから何言ってるのかわかんない洋楽の方がBGMに向いてるってわけ。気に入った曲は知りたくなるでしょ？」

「あー」

「まあ、万太郎さんが貸してくれた漫画の影響もあるんだけど」

「あれ、こわくねー？」

「慣れたら結構面白いわよ、あれ」

「ふーん。でもさ、それ知ってるからやってほしいんじゃない？」

「やっぱそうよねー」

あーもう、どうしよう、と疲れたようにジュンはいう。大輔はどこかほっとしたように、笑った。

ヤマト編2

「なあ、ちよつといいか？」

「あ、は、はい！なんでしょう、石田君」

「なんでそんな硬いんだよ」

「だって石田君がアタシに話しかけるなんて珍しいと思つて」

「なんだそれ」

「アタシのところにはパートナーが来るまで、ちゃんと話したことない気がするんだ」

「……そういえばそうだな」

「でしょ？で、そんな石田君がアタシに何の用？京にもお姉ちゃんにも話せないことな
んだらうなー、とはお察しするけど」

「まあ、そうだな」

「で、なにに？協力するかは報酬によるわよ」

「知つてた。これでどうだ」

「さつすが、石田君！毎度あり！」

うふふ、と怪しく眼鏡が光る。ヤマトから渡されたバンドのチケットを数える姿は商

売人のごとく。井之上家の次女は要領よく生きてゐる。ちよつとした臨時収入のためならヤマトたちのバンド活動のリークもするし、太一たち選ばれし子供たちの中学生活を事実だつてする。

お姉ちゃんとお姉ちゃんのお友達のお願いを聞くことでちやつかりおいしいポジションをゲットし続けてきた彼女は、基本的にもつとおいしい報酬を提示すればそつちに流れていく。まるでマスメディアのごとき流動性ながら、ぎりぎりのラインを保つていられるのは、基本的に傍観者の立場であり続けているからだろう。面白ければそれでいいのだ、この子は。

「で、なーに?」

「ひとつ聞きたいんだけど、ジュンさんと井之上のお兄さんで付き合ってるのか?」

「え、そんなことを聞きたかつたの?じゃあチケット返すよ、見合わないもん。付き合つてないよ」

「え、そうなのか?」

「付き合ってるわけないじゃん。お兄ちゃんはただいま3度目の破局を迎えたばかりで、絶賛女不審に陥つてるところだもん。可哀想だからお姉ちゃんとジュンさんで一緒に遊びに行つてみるみたいだけど、ホントなら彼女さんといくはずだったところに行つてるだけだしね」

「いや、でも、最近井之上のお兄さん、よくジュンさんと話してるだろ？」

「そりゃ、お兄ちゃんがOBだからに決まってるじゃない。ジュンさん、よくお兄ちゃんにアドバイスをもらってるもの。まあ、師匠みたいなもんだし、お兄ちゃん。卒業作品の最終調整だからって、ジュンさん夜遅くまで残ってるの石田君も知ってるでしょ？PVのプロモ、忙しいからって断られたんだから」

「まあな。そうか、付き合ってるのか。ありがとう、井之上。助かった。これ、お礼に渡しとく」

「え？いいの？じゃ、遠慮なくもらうね」

「他のやつにはいうなよ」

「はいはい、わかってるって」

「ほんとかよ」

「ちやんともらえるものもらえたら何も言わないわよ、アタシはね」

「ほら」

「りよーかい、火消しはまかしといて」

につこり笑った井之上家の次女に、ヤマトはため息をついたのだった。井之上家で一番苦手なのは間違いない彼女である。でも、今回ばかりは仕方なかったのだ。京は間違いない根掘り葉掘り聞いてくるし、口にチャックがついていない京ではお台場小学校組

に筒抜けになるだろう。

そうすれば瞬く間に噂は広がってしまう。お姉さんはいわずもがな。お姉さんはヤマトのバンドのファンなのだ、めんどくさくなることは間違いなかった。ただでさえジューンはヤマトのバンドの活動の裏方として助っ人をしていてくれる貴重な人材なのである、トラブルになればもともと乗り気ではなかった助力がますます遠のいてしまうだろう。

もともとジューンとヤマトの接点はなにもかもが間接に間接をはさんだものなのだ。そんなヤマトが選ばれし子供とデジモンという関係以外で、初めてできたジューンとの直接的な繋がりをこんなところではなくしたくは無かったのである。

きつかけははつきりしている。ヤマトとジューンの交流は、中学生になるまでは、お世辞にもほかの選ばれし子供たちと比べて飛びぬけて大きいものではなかった。ゲンナイさんと一緒に選ばれし子供たちの冒険や戦いをバックアップしてくれた、心強い味方であることは事実だし、頼りにしていた。

大人だから遠い所に行く時、保護者役として同行してくれた。ふりかえれば必ずいる、待っていてくれる存在であることはわかっていた。でも、それは他の選ばれし子供たちにとっても同じだったし、ヤマトにとってもそれだけだった。大きく関係が変化したのは、やはり大輔が選ばれし子供に選ばれたことだろうか。

最愛の弟が選ばれし子供になったとわかった時、いままでバックアップに徹していたジューンは、本格的に選ばれし子供たちの活動に関わるようになった。今までは見守る立場だったが、明らかに守る立場に変化した。あたりまえだ、大輔は家族なのだから。

しかも京も伊織もジューンにとっては、まえの選ばれし子供たちと違って家族ぐるみの付き合いをしている妹や弟みたいな存在だった。より身近な存在だった。それは関わり方が変わってくるのも当たり前である。そのあたりまえがヤマトにとっては、あまりにも新鮮にみえただけ。

ジューンが家族や仲がいい友達に向けるなにかもが、ヤマトのしつっているジューンと違っていたから、驚いたただけだ。そのなかにヤマトが入っていない、というあたりまえの現実が受け入れられなくて、なんだかいやだった、それだけである。気付いたら、ジューンを目で追っていた。今までのなにかもが間接的な関係では物足りなくなった。つまりはそういうことだ。

未だにヤマトはその感情に名前が付けられないでいた。ジューンに可愛がられている大輔たちが羨ましいのか。その優しい眼差しのさきにヤマトがいたいのか。それともジューンの特別になってそのすべてを独占したいのか。タケルを中心に世界が回っていたヤマトが、じぶんだけの世界を回し始めてからまだ3年しかたっていないのだ。

生まれて初めての感情である。とまどいしか生まれない。バンドだって、お父さんが

やっていた、という話をきいてはじめてなのだ。生まれて初めてヤマトがやりたいといった。じぶんだけの、を捜し始めた。思いのほか周りが盛り上がって、ヤマトもヤマトなりに楽しんでるからやってるけど、まだまだいろんなことをやって、捜していくつもりだ。

タケルのお兄ちゃんではない、ヤマトというものを見つげるために。その先でジュンとつながりができて、今まで知らなかったジュンを知って、ヤマトも知ってほしいと思っただけかもしれない。みんなに認められるということに過敏な少年は、わりと自己顕示欲が強い。ジュンがヤマトのバンド活動に協力してくれていることがうれしけれど、あんまり興味がなさげなのが嫌なのかもしれないなかった。

とりあえず、ジュンに彼氏がいないと知ってほっとするくらいには、ヤマトはジュンのことを意識している。ポケットから出した携帯を操作して、メールを送る。今日はバンドで遅くなる。明日の朝食と弁当は期待しないように。食器はシンクにおいとおくこと。まじかよという泣き顔のメールが届いたのは、すっかり暗くなってからだ。

「ヤマト君じゃない、どうしたの？いま帰り？」

「本番近いから練習したら遅くなって。ジュンさんは？」

「あー、アタシ？ようやく卒業作品にメドがついたからね！もう遅いつて追い出されちゃってねー、家に帰ったらまた頑張るわ」

「いつごろ終わりそうなんだ？」

「春休みを生贄に捧げればすぐできるわ、たぶん」

「ジュンさん、大学行くんだよな？準備は？」

「い、痛いところついてくるわね、ヤマト君。そうねー……あはは。正直、あと少しで終わりそうなの。これが出来たらゲンナイさんのところに持って行って、デジバイスのプログラムにアップデートしてもらおうかと思ってるわ」

「卒業制作までそんなプログラム組んだのか……」

「まあ、今までの集大成だしね。大学行ったら、デジタルワールドの援助なしで組み上げてやるわよ、新しいアプリ。楽しみにしててね。将来はそっちに進むのが夢なの、アタシ」

「ユメ、か」

「ヤマト君はどうなの？新しい曲進んでる？」

「ジュンさんが加わってくれたらすぐできるって、前も言っただろ」

「あつはは、まったー。光子郎君みたいな優秀な子がいるじゃないの、お台場中には」

「ジュンさんみたいに、柔軟に対応してくれないんだ。光子郎は音楽方面は無理だから京ちゃんに任せたらテクノポップが出てきたからだめだ。俺のバンドはそういう方向じゃやってないって」

「あー……京ちゃん、今あっちにハマってるからねえ。百恵の影響かなー」
「ジュンさんもああいう方が好きなのか？」

「まえいったと思うけど、アタシは音楽自体に興味はないわよ。作業するのにかかっての方が集中できるってだけでね。百恵の音響に使ったことがあるからやってるだけで。だからさ、アタシよりヤマト君の音楽に興味持つてる子にお願いした方がいいと思うわよ、正直」

「でも、オレはジュンさんだからお願いしたいんだ」

「えー、なんで？まあ、そりゃ、全然知らない子よりはいいでしょうけど、どうなのそれ」
「ジュンさん、4月から大学だろ？」

「まあね」

「忙しくなるだろ」

「たぶんね」

「会えなくなるだろ」

「……えーつと、ヤマト君。それ、言い方間違ってる？まるでヤマト君がアタシに会えなくて寂しいって聞こえるんだけど」

「間違ってる。あつてる。だから問題ないよ、ジュンさん」

「……えーつと……え、ほんと？」

「ほんとに決まってるだろ」

「そうよね、ヤマト君はそういうところ真面目だもんね。冗談でいうわけないわよね。でも、えーっと、あー……ごめん、待ってくれる？全然想定してなかった」

羞恥で赤らんだ顔を隠すようにジyunはヤマトから視線をはずす。さらりと流されるところまで熱を帯び始めるのを自覚する。しばらくの沈黙。あたまのながぐるぐるしているのか、言葉がでてこないのか、ジyunはなにもいわないままヤマトと共に帰路を歩いていた。

「想定してないってなんだよ、なにを想定してたんだ」

「え？あー、そりゃ、太一君と空ちゃんについてとか、タケル君と光ちゃんと大輔のこととか」

「好きな人がいるのに、他のやつのこと話せるほど、余裕なんてないっての」

「あ、そ、そつか。そうよね、あはは……」

「驚いたのはこっちだよ」

「え？」

「流されると思ってた。恋せよ、少年って大輔をけしかけるみたいにならなからかわれるのかと思ってたんだ。なのに、なんだよ、その反応。期待させるなよ」

「……」

「ジユンさん？」

ヤマトを見つめる瞳は、ようやく本気であると悟ったらしく、どうしよう、で固まっている。なんて答えればいいんだろうか、と必死で考えているようだ。

「……… えーと、ちよつと待って」

「待てていつたな、また」

「……… うん、言ったよ。そうだよ。アタシ、まだ心の準備がだね、」

「ならいつまで待てばいい？」

「え、っ……… えっとー、その、うーん………」

三、と指を出される。

「日？」

「短すぎるよ！せめてか月！」

「長すぎるだろ」

「却下!?!う、あ、あんまり待たせるのは悪いとは思うけどね、さすがにお互いにやるべきことあるじゃない？主にデーモンとかの行方探しとか」

「保留するつもりかよ、ジユンさん？」

「で、できたら」

「……………なら、先にいつとくけど、俺はもう告白したんだ。ジユンさんの返事待ちだよな、今」

「うん、そうだね……………」

「最初にいつとく。年下だからって思われたら困るから。俺、自重しないからな」

「…………… なんかグイグイ来るね!？」

「なんだ、しらなかつたのか？」

「知らなかつたよ！ヤマト君、ふっきれるの早すぎない!？」

「遠回しにアピールしたら邪魔が増えるだけだつてよくわかつたからな。直接会う機会増やす方が早そうだし」

「冷静に分析するのやめてっ……………て、ぎゃー!」

「待つてやるけど、なにもしないとは言つてないからな」

ヤマトは笑つた。

太一編

『ジユン、メールが届いていますよ。太一からですね』

「え、太一君から？へえ、珍しいこともあるもんねえ」

四苦八苦しながらローマ字打ちを人差し指で押している、微笑ましい小学6年生に思いをさせる。いつもなら、大体このくらいかな、とあたりを付けて本宮家の固定電話か、ジユンの携帯電話のはずだ。相手の時間を拘束しないで、好きな時に見てほしい、という気遣いはまだ小学生にはない。ジユンはドット絵のフアスコモンが指差すファイルをクリックした。誤字脱字があるけど、いいたいことはわかるので赤ペン先生はやめておこう。ざつと目を通した、ジユンは、へー、やるじゃない、と感嘆する。

『どうしました？』

「みてよこれ、選ばれし子供たちでチャット始めたんだって」

パスワードとIDを入力しないと入れない、会員制のチャットルームの招待状だっ

た。アドレスは太一の家のパソコンなので間違いないだろう、ファスコモン曰くウィルスメールのプログラムではなさそうだから。

『どうしてまた?』

「大晦日で懲りたらしいわよ。みんなと連絡取れないのはやっばりまずいってことになったみたい。インターネットにつなげば、アクセスできるみたいね。構造はゲンナ伊さんの隠れ家と同じよ。ほら、デジヴァイスを端子でつないで、個人認証とパスワードとIDを入力するタイプのやつ。やってみましょうか」

ジュンは太一のデジヴァイスのプログラムを持ってるので例外である。ジュン用になぞなぞパスワードやID、個人認証に使っているデジ文字のプログラムコードを打ち込むページが追加されている。これは光子郎かゲンナイさんの入れ知恵だろう。メールをうつにも四苦八苦するような太一がチャットの管理人なんて出来るわけがない。

見覚えのある名前がカタカナ表記で並んでいた。しかし、確認しにきただけのよう
で、一言二言コメントしてから出ていく子供たち、デジモン達ばかりである。スクロールしていけば、ジュンが入室したとき、反応してくれたのはタイチだけだった。どうや

ら待っててくれたようだ。

「お招きありがとね、太一君」

「あ、ジュンさん、来てくれたんだ！待ってたぜ」

この文が帰って来るのに10分くらいかかった。そのうち、何度か会話をする。ジュンさんうつのはえーなあってきて、思わず笑ってしまう。心配しなくても太一が高校生になるころには、ケータイメールをうつ速度はみんな早くなっているだろう。

そのうち、いちいち文字をうつのがめんどくさくなってきたのか、太一は今日の予定を聞いてきた。どうやらチャットに集まった子供たちは予定が合わなくて暇らしい。いいわよーって言葉を最後に、ジュンはチャットルームを後にした。

「あれ、姉ちゃん出掛けるのか？」

パソコンをきつてヘッドフォンを外した、ジュンは、廊下で大輔に鉢合わせした。めずらしーという顔をしている大輔をべしつと叩きつつ、ジュンは笑う。

「いやじゃないの、たまには」

「百恵さんどこ？」

「うーうん、太一君とよ。大輔もくる？なんか暇みたいよ。ゲームでもする？」

「オレ、これから部活！」

「あ、そっか。太一君が休みなら大輔は部活よね、ごめんごめん忘れてた。いつてらっしやい」

「いやー、姉ちゃん」

「馬鹿言つてないで、行つてきなさい。レギュラーかかつてるんでしょ」

「姉ちゃんも行かなくていいのかよ？」

「そうだった。それじゃーね、大輔」

「おう！」

大輔は階段に向かった、ジュンを見届けて、エレベーターに向かった。あー、よかった。データーミナルで、ジュンが太一のマンションに向かったと太一に報告しつつ、大輔はエレベーターのスイッチを押した。それは一昨日に遡る。

「なあ、大輔」

「なんすか？太一先輩」

「大輔、ジュンさんって、京ちゃんの兄ちゃんと付き合ってるのか？」

「は？え、なんでつすか？え？」

「え、違うのか？」

「え、ちがいますよ？」

「え、でも、フェス見に行つたんだろ？」

「あー、あれですか？あれは京の兄ちゃんが振られちゃって、京の姉ちゃんとうちの姉ちゃんが友達だから一緒に行つただけつすよ。払い戻しできないから、もつたいないからって」

「あ、そうなのか」

「うちの姉ちゃん、全然おしやれしないから、時々京の姉ちゃんに連れてかれるんです。たぶん、着せ替えごっこしたあとじゃないつすか？」

「あ、あー、なるほど。だからいつもと様子が違つたんだ。車から出てくるからってつきり」

「京の姉ちゃんもいたのに気付かなかつたんですね」

「いや、気まずいだろ、なんとなく」

「そうつすか？」

「うん、気まずい」

いつも意識していない女の子が女の子になってるのを見てしまった感覚である。

「じゃあ、ジュンさんは付き合ってる人いないんだ？」

「いないっすよ、たぶん」

「そっか」

「なんでそんなこと聞くんすか？」

「え、あ、あー、なんとなく」

「なんとなく」

じとめの大輔である。

「なんだよ」

「姉ちゃん、そういうの興味ないと思います」

「え、まじで？」

「パソコンでなにかしてる時が一番楽しそうなんです。俺のサッカーの試合とつてくれるけど、編集してるときが一番楽しそうだし、機械を使ってる時が好きなかも」

「光子郎みたいだもんな」

「はい」

「ほんと似てないな、お前ら」

「でも、俺の自慢の姉ちゃんです」

「うん、知ってる。なあ、ジュンさんって他に好きな物ってないの？」

「なんでしよう、チャットとか」

「チャットオ？あのパソコンでうつつやつ？」

「はい、そうです。海外の人とよくやっています」

「え、ジュンさんって英語できるんだ」

「はい、できます」

「そっか、ますます光子郎っぽいな。チャットかあ。どんなの？」

「パソコン部のひとのあつまりとか」

「へー、そっか。そういうのもあるんだ。光子朗に聞いたらできるかな」

「さあ？」

「そっか、サンキュ、」

「はい」

大輔が知っているのはここまでだ。光子郎がこっそり教えてくれたのは、そのあとの

ちよつとしたやり取りである。

「太一さんがチャットを考え付くなって思いもありませんでした」

「それどーという意味だよ、光子郎」

「叩いて直そうとする人とは思えないです」

「いうようになつたな」

「お互い様です」

あはは、と二人は笑つた。これでパスワードを入力すればいける。デジタルワールドのデジタルゲートを開く要領をまねさせてもらった。ただのパスワード画面だけだと突破されてしまう。デジヴァイスの認証を追加したのだ。USB端子でつなげばいい。こうして出来上がったのだった。

ぴんぽん、とチャイムが鳴る。はーいという声がして、太一がやってきた。

「おじゃましまーす」

「どーぞ。だれもいねーけど」

「あれ、ホントだ。光ちゃんは？」

「京ちゃんとどつか遊びに行くって朝出掛けた」

「あー、そっか。太一君の家って共働きだっけ」

「そうそう、だから今はだーれもないんだ。ヤマトたち捕まなくてさ、この夏休みじゃみんな遊びに行つてて相手がいなくて暇してたんだー」

「あはは、そうなんだ。どーする？ゲームでもする？」

「する！大輔から聞いたけど、ジユンさん、
×強いんだろ？やろーぜ！」

こっちこっち、と太一が案内する。スリッパを用意するくらいには成長のあとが見られる太一に感心しつつ、ジユンは子供部屋を急いだ。

「へー、光ちゃんと部屋別れたんだ」

「オレだつて一人部屋ほしいって。いいよなー、大輔。小一もう一人部屋だつたんだろ？」

「ちゃんと部屋で寝始めたのはもつと上がってからだけだね」

「あはは、なんだよそれー。光はちゃんとベッドで寝てたのに」

「光ちゃん、お兄ちゃん子だもんねえ」

つられて笑った、ジュンと共に、太一は部屋に戻ってきた。さっきのチャット画面がつけっぱなしだ。だめじゃない、と、ジュンは笑って指を指す。太一はあーそれ違うやつとかえす。

「違うやつ?」

「、ジュンさんが来るの待ってたら暇でき、デジモンってキーワードでヒットしたページを見てたんだ」

「へー、そうなの。見てもいい?」

「いーけど、つまんねーやつらだぜ。デジモンなんか嘘だつていうんだ」

「まあ、見たことないなら仕方ないわよ」

「ディアボロモンの戦い見てたくせに、居ないつていうんだ」

「あ、そうなの?」

ちよつと見せて、と、ジュンはパソコンを見る。カーソルを動かす。こいつ、と太一は指を指す。ジュンは目を細めた。

「これ書いたの太一君？」

「え、そーだけど？」

「フアスコモン、急いでくれる？」

「かしこまりました、ジユン。それでは失礼いたします」

「え？」

はあ、と、ジユンはため息をついた。

「太一君、こういうところでは誰が見てるか分からないんだから、じぶんのこととか、友達のこととか、デジモンのこととか、勝手にしゃべっちゃいけないのよ？」

ドット絵のフアスコモンが太一のコメントデータを食べてしまった。チャットでは、いきなり消えてしまったコメントに、大騒ぎになっている。

どのみちゲンナイさんが動くとは思うけど、先に対処したことを報告ヨロシク、とフアスコモンに言いながら、ジユンは苦笑いした。あー、そういえば、そんなこと先生がいつてたような、とつぶやく太一に、ジユンは軽く叩いた。

「太一君はまずネットマナーを学ぶべきよね、光子郎君に教えてもらったら？」

「でも光子郎、うるさいんだよね、こういうの」

「いやいやいや、あたりまえだからね、太一くん」

「どーせなら、ジュンさんがいいな」

「もう仕方ないわねえ」

「やった」

「なーに、なんかうれしそうじゃない。言つとくけどあたしはスパルタよ？」

「いいんだよ、ジュンなら」

「なによそれ、へんな太一君」

ジュンは笑った。

太一編 2

びんぼーん、つてチャイムが鳴った。はーいってモニタを見れば、どこかそわそわしている、落ち着かない様子の太一が立っていた。

太一がジユンの家を訪ねてきたのは、ホワイトデーだからである。3倍返しが基本よね、つて空やミミに入れ知恵をして、結構高そうなお菓子を選ばれし子供達に配ったバレンタインデー以来の訪問である。お台場小学校サッカークラブは、上級生と下級生のクラブチームが交互にグラウンドを使っているため、ただいま大輔は部活に出かけたところである。

「いらつしやーい、太一くん。どうしたの?」

「こんにちは。ほら、今日、ホワイトデーだろ? もつてこいって言ったのジユンさんだろー」

「あはは、そうそう、よくわかってんじやない。せつかくだから上がつてく?」

「あ、はい」

ジューンはスリッパを差し出した。はい、これ、つて差し出されたのは可愛い包み紙にはいったお菓子である。ホワイトデーだし白いマシュマロが定番でいいんじゃないか、つて考えてそうなのに、マシュマロじゃないことにジューンは驚きを隠せない。

大げさなくらい取り乱してやろうかと思つたのに。マシュマロあなたが好きです、ネタは定番である。これは光ちゃんに入れ知恵されたかな、つてからかいのネタが減つて残念である。それにしてもこれはどう言う意味だろう？とジューンは考える。

光ちゃんがお買ひものに付き合つたのなら、あなたは友達のまままでいてください、つて意味のクツキーあたりを勧めそうなのに。キャンデーが入つてるのはどういうことだ。はっはーん、とジューンは思つた。

空ちゃんの間違えたな、この子。不慣れなことするから、とジューンはこっそり笑う。綺麗なりボンが付いてるお菓子の小袋なんて、男の子が持つてるのは気恥ずかしいものがあるのだろう。コートをかけている太一を見ながら、ジューンは飲み物を準備するから先にリビング言つてて、と追い立てる。行つてみると、どこかやつぱり落ち着かない太一が座つていた。

「どうしたのよ、太一くん」

「実は相談があつて」

「相談?」

「そうそう、相談!」

「ふうん、そうなんだ。それで?好きな子に誕生日プレゼントでも贈るわけ?」

な、な、な、なんで!?!と顔を真っ赤にした太一に、ジュンは笑った。

「みりやわかるわよ、顔に書いてあるもの。恋せよ少年ってね」

けらけらと笑うジュンに、バツ悪そうに太一は頭をガシガシと書いた。そっかあ、とがつくり肩を落とした太一は、ほんのちよっぴりすねたような顔をする。太一は、そんなにわかりやすいかよ、とわかりやすいくらい落ち込んでいる。

そりやあねってジュンは割と容赦なく追い討ちをかけた。がんばれ、太一くん、なんてどこまでも無責任で投げやりな言葉をなげかけた。ここにきてからてんぱりすぎよ、って蹴落とすことも忘れない。

ジュンは心の中でこっそり舌を出す。デジタルワールドの冒険をたつぷり読み込んでいる20XX年の人間にとっては、目の前にいる八神太一という少年はとりわけ描写

が多い登場人物だったから、今、彼がどういふ状況にあるのか手を取るようにわかるのだ。

にやにやしてしまうのは無理もない。サッカー部をやめちゃった空は、華道師範代のお母さんの手ほどきを受けて、日本人女性に華麗に変身しつつある。今までサッカーボールを蹴っていた男の子みたいな女の子が、どんどん可愛らしい女の子になっていくのだ。

意識しないほうがおかしいだろう。誕生日プレゼントの件で喧嘩するくらい進展したエピソードは、オメガモン誕生の章で詳細に語られているから知っている。そういうえばもうすぐそんな季節なんだ、ってジユンは思った。今年中学3年生でよかった。

今日が受験日だったら受かる気がしない。個人的にはあの空がピンどめのプレゼントで怒るなんて想像できない。作者の視点で書かれているため心理描写がないのが困る。太一が女の子として意識しはじめた一方で、空は今までの男のこと女の子の友人関係が変化するのが怖かったのかもしれないし、純粹に気に入らなかつたのかもしれない。

あのプレゼントのデザインは結構可愛かったから、女の子にプレゼントすることに不慣れっぽい太一が用意したにしてはセンスがいい。だから光かミミに相談して用意したのがバレてしまい、太一に自分で用意して欲しかった空の怒りを買ったのかもしれない

い。

当時、小説が出たころ、いろんな憶測がながれたものの、彼らは沈黙を守ってしまい真相は闇の中だった。複雑な乙女心である。女を捨てる生活をしていた前世の延長で、恋人がいない歴Ⅱ年齢を更新中のジユンにはさっぱりわからなかった。

「あーあ、ジユンさんにはかなわねーなあ」

ちえーってうらめしげに見てくる太一に、ジユンはやにや笑った。もう隠すことも面倒になったのか、太一ははいはい、そーですよ、好きな女の子にプレゼントしたいんだよ、って自暴自棄な暴露を決行した。

どうせ誰だかジユンさんにはわかっているみたいだから、いわないけどさ、ちつくしよー！って面白くなさそうに、ふてくされてる。そこまできて、なんで名前を隠すのよ、ってジユンは首をかしげた。そんなの恥ずかしいに決まってるからだろ！って太一は大声を上げた。

こころなし顔が赤い。頬が熱を帯びるのがわかるのか、あーくそ、って舌打ちした。そして太一は、思いつきりおもちゃを見つけた顔をしているジユンを見て、この反応すらおもしろいって思われてることを察して、あーもう、って首を振った。

「わかってんなら、教えてくれよ、ジュンさん。なにがいいかなあ?」

「そんなの自分で考えなさいよ、アタシが手伝ったってバレたら、微妙な空気になるでしょ」

「そりやそうだけどさあ、ぶっちゃけ思いつかないんだよ」

「それなら、なおさら考えなきゃ」

「えー、なんだよそれ。じゃあさ、ジュンさんは何欲しい?」

「アタシに聞いてどうすんの」

「またそういう意地悪なこという」

「誕生日プレゼントねえ、まあゲームはだめよね」

「そんな高いの買えないっての」

「ま、そうだけどね」

うーむ、とジュンは考える。中学生とはいえ、精神年齢は××歳となっているジュンが欲しいものは、普通の女の子とかけはなれているといってもいいだろう。少女漫画やドラマ、小説、映画の世界である。彼氏?何それ美味しいの?レベルでリア充イベントとはリアルに遠ざかって等しい前世を思い出し、ちよつと死にたくなる気分になりなが

ら、はるかかなたの小学校時代を思い出す。

小学生といつても、高学年になると、だんだん大人びてる子が多かった印象である。女の子は男の子よりも精神的な成長が早いし、大人びた言葉遣いとか仕草をすることが多かった。子供っぽいおもちゃはまず却下。お化粧してる子もいた気がするけど、今は1999年である。そういった子供向けのお化粧品はまだお高めだし、男の子からのプレゼントで化粧品って斜め上にカツ飛びすぎだ。

「アタシは文房具かなあ」

「え? 文房具?」

「そうそう、文房具。もちろん、可愛いお店に売ってるやつね。可愛いスタンプとか、手帳とか、そういうの。学校で流行ってるキャラものだったりするとポイント高いかもね。そういうの集めてる子なら、喜んでくれるんじゃない? まあアタシは集めてないけどね、学校に持っていけないものもらっても困るし」

「文房具かあ」

「あ、でも、アクセサリーの方がいいかもよ。文房具は趣味が合わないといらないしねえ、アクセサリーだったら集めてる子も結構いるし。学校もってつちやダメってとこ、結構少ないでしょ?」

「そうか?」

「そうそう、どっちも場所取らないし、部屋を散らかさないし、アタシはもらったたら結構嬉しいかなあ。おつきなぬいぐるみもらっても、置き場所に困るでしょ?友達と見せ合いつこして楽しめる物なら、なおいいんじゃない?あー、そうだ、手紙書いたらどお?」

「え、手紙?」

「そうそう、手紙。ドーせ言いづらいでしょ?伝えたいことは書いたら?メールとかあるしねえ」

「ジュンさんは意地悪だよな、そういうところ」

「はあ?何いつてるのよ、太一くん。アタシは太一くんの相談に乗ったげてるだけでしょ?好きな女の子にあげるプレゼントを考えてあげてるだけじゃない。しっつれいねえ」

「そりゃ、そうだけどさ。ったく、そういうところが意地悪なんだよ!あーもう、わかってるくせに」

すつかり怒ってしまった太一を見て、ジュンはいい加減おちよくるのをやめることにした。

「ごめん、ごめん、太一くん」

「つたくもー」

「でもま、参考にはなつたでしょ？」

「まーな、嫌ってほど参考になつたよ、くっそう」

「嫌なら最初っから自分で考えなよ、楽しようとすからそうなるのよ。いい薬でしょ」

「なんだよそれー」

ま、がんばれ、ってジユンは笑った。

太一編3

ぴんぽーん、とチャイムが鳴る。

「こんな時に誰よ、もう。大輔、出てー?」

「えっ、僕?お姉ちゃんは?」

「私は忙しいの!」

「僕もゲームいいところ!」

「あーはいはい、お姉ちゃんの手帳から好きなモンスター持っていいから、お願い」

「え、ほんと!?やった!」

せつかくの土曜日だというのにパソコンとテレビを占領され、朝からずっとスタンバイしている姉に追いやられている。買ったばかりのテレビゲームができないとソファに寝っ転がって携帯ゲームをしていた大輔はようやく立ち上がった。ゲーム機を持ったまま玄関に向かっていった大輔を見届けて、ジュンは首に引っかけていたヘッドフォンをつける。

今朝からジュンはずっとびりびりしていた。

ほんの一週間前にあった2月28日の電子機器の不具合のニュースのせいである。お台場霧事件、もしくは光が丘テロ事件の関係者、そして未だに犯人が捕まらない電波傷害事件を覚えている世間に味を占めたメディアにより、この手の事件はとりわけ大きく報じられる。

まだ一般人が気軽に情報を発信できない時代だからメディアといった一部を対応すればいいが、そのうちデジタルワールド側の隠匿工作にも限界が来る時代が絶対にやってくる。2月28日は閏年に伴う電子機器の不具合が原因であり、デジモンは関係ないとゲンナイさんから回答をもらえるまでは気が気ではなかったのだ。

あーよかった、で、気づいたら3月4日である。ジュン以外の子供達は緊張感から解放されてのんびりとしたものだ。ジュンだって未来予知に近い知識が無ければそうしなかった。現段階で警鐘を鳴らすのは不可能だ。だからせめて迅速に対応できるようにしたかった。

お台場霧事件以後、ジュンは選ばれし子供たちのネットワークの拡大に尽力してきた。光子郎やハーバード大学に通う小学生に話を持ちかけ、増え続ける選ばれし子供たちの情報交換や交流を兼ねた場が必要だと提案したのだ。それはお台場小学校にパソコン部を作る大義名分にもなり、ジュンがお台場中学校との連携を促進させるお膳立てにもなった。

デジモンを知っている子供達のコミュニケーションとお台場霧事件や光が丘テロ事件に類似した出来事を語るようなコミュニケーションを作った。光子郎はどっちも行き来しながら、ジュンと手分けしてゲンナイさんにデジモンの関わりが疑われる事件について情報を提供するよう関係は強化されている。

なにせ選ばれし子供達はもちろんデジモンたちも、去年の12月31日の深夜、その情報伝達の拙さにより酷い目にあつたのだ。ゲンナイさんたちとの連絡手段が確立していなかつたせいで、偽物のメールに誘き出された。しかもデビモンによる分断作戦を再現され、みんなばらばらに飛ばされ、異次元に幽閉されてしまった。

その上、再構成前のダークマスターズに蹂躪されたデジタルワールドで、歴代のボス達を一気に相手にしなければならぬという無理ゲーを強いられた。新たな仲間である秋山遼がいなければ間違ひなく詰んでいた。もし、アイドルコンサートに遠征にいつているジュンがゲンナイからのSOSに気づかなければ、きつと幽閉されている世界がミラーワールドだなんて気づかないまま、遼は太一達を見つけることができなかつたに違ひない。この教訓から、ハウレンソウは大事だとみんな学んだのだった。

選ばれし子供達の掲示板で、ジュンは正体不明のデジモンに注意喚起するゲンナイさんからのメッセージを受け、直感したのだ。冷戦時代のアメリカで製造され、2002年に遺棄される運命にある核兵器の1つが何者かにハッキングされ、お台場近隣に着弾

するという大事件が起こったことを知っている。

歴史の授業で必ず習う出来事だし、デジタルモンスターについて調べると一度は目にする超弩級の有名デジモンだ。今でこそデジタルワールドに受け入れられる形で転生し、テイマーにも愛好家が多いこのデジモン。原始のデジタルモンスターそのものの生態をしているため、人間世界との共存を決めたデジタルワールドにとって最も忌避すべき存在であり、本来のデジタルモンスターを愛好、もしくは誇りに思っている者達からは神聖視されている。

たった40分の奮闘はデジタルワールドの冒険で何度も読んだから知っている。ジューンが何もしなくても大丈夫だとはわかっているが、できることなら協力したいと思うのはテイマーの端くれだからだ。

3月4日はジューンにとってまさにXデーなのだ。この日ばかりは友達との予定は入れなかったし、なにもしないと決めていたからほかには見向きもしないつもりだった。なのになんかの訪問客である。ジューンは集中力が切れてしまった。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん、空さん」

「え、空ちゃん？」

「うん」

「あれ、なんか約束してたっけ？」

「お姉ちゃん、はやく！どつか出かけるのになんでそんなゆっくりしてるの？」

「えっ、ちよつとまって、え、嘘」

きよとんとしているジュンに、はやく、と大輔は急かす。サッカー部の上下関係は絶対だ。たとえ空がすでにサッカー部を辞めてお母さんから華道を習い始めていたとしても、かつて太一とツートップだった彼女は、大輔にとって尊敬すべき先輩であり、絶対に逆らえない先輩である。

はやく！とよほど急かされたのだろう、大輔は騒がしい。さすがに空だとは思わなかったジュンである。一応、2月28日の事件については子供達に通知はしてあるし、何かあったらすぐに連絡するとは伝えてあるけども。なにかあったんだろうか。立ち上がったジュンを後ろから押していく大輔はどこか楽しそうだ。

「おはようございます、ジュンさん。遅いから迎えに来ちやいました」

そこには、明らかに何処かにお出かけにいく格好をした空が居た。

「あーうんおはよう、空ちゃん。ごめん、今日なんか約束してたっけ？明日じゃなかった？」

「今日ですよ、ジュンさん」

たしかに空と遊びに行く約束はしていた。高校受験を控え、志望校を事前に見に行く

ために靴を新しくしたいと言っていたら、お誕生日が近いという情報も相まって一緒に買い物に行くことになったのだ。3月4日はもちろんNG、だから5日にしたはずなのだが。

疑問符がとんでいるジュンに、空は教えてくれた。ゲンナイさんからデジモンは関係ないと教えてもらったとき、ミミはこれでハワイにいけると喜んだ。いいなー、と反応した空に、じゃあ二人でどこかでかけようかと提案したのがジュンだというのだ。そういえばずっと抱えていた緊張感から解放された矢先だったから、そんなこと口走っちゃったよーな、してないよーな。

「たしかにそう言われてみれば、そんな気が……あっちゃー、ごめん。すっかり忘れてた。ちよつとまってるね」

「お姉ちゃん出かけるの?」

「うん、出るわ」

「やった!」

「そーだ、大輔。ちよつといい?」

「なに?」

「もし太一くんか光子郎くんから電話がかかってきたら、私の電話に掛けるようにってくれる?あるいは頭に

「171ってつけてね」

「うん、わかった。でも171ってなに？」

「お台場霧事件みたいな事件が起こったら使える留守番電話のことよ」

「わかった！」

去年、大輔はなんだかわからないけれど、とつても怖い思いをした、というぼんやりとした記憶が残っている。ジュンの言いたいことはすぐわかってくれた。

「わー、ごめんね！すぐに着替えるから待ってて！あ、あがる？」

「いいですよ、待ってます」

空はなんとなく予想はついていたようで、気にする様子はない。一つのこと集中すると周りがみえなくなる男の子を空はよく知っている。ジュンが似たようなタイプだと知っていれば、こうもなる。それにどこか噂話をする女の子のような、妙に生き生きとした、楽しそうな雰囲気がある気がする。ジュンは不思議に思いながら自分の部屋に引き返した。

ネット環境につながることができればいいのだ、最悪。なら、そういったところを選んで買い物なり遊び場を決めたりすればいい。必死で頭を回転させながら、ジュンはよそ行きに着替えて玄関に向かった。

「聞きましたよ、ジュンさん」

「え、なにが？」

「太一からキャンデイもらったんですよね？あの太一から。ね、どうでした？」

「どうって、おいしかったけど」

「そつちじゃないですよ——」

空はどこか楽しそうだ。それはもう芸能人の恋愛模様を好き勝手かき立てる雑誌のごとく、好奇心に満ちあふれた顔をしている。にこにこ笑っている空に、以前のバレンティンデーを思い出したジュンはしまったと血の気がひく。結局あのキャンデイの入った袋、間違えてない？って返そうとしたら、引つ込みがつかなくなってしまったのか、やけくそになった太一からあげると言われてそのまま逃げ帰られてしまったのだ。

さすがにわざわざ届けに行くのも、もし光と会ったら太一が余計かわいそうなことになる。というわけで結局太一の間違えてしまったホワイトデーのお返しはジュンが美味しくいただいたのだ。賞味期限が当日だったから仕方ない。てつきり太一は太一で別のプレゼント用意したと思っていたのに、なんだこの会話。もしかして太一君、クッキー渡しちゃったんだらうか。さすがに小学生である。込められた言葉に一番敏感な時期だ。

空は太一がジュンに好意があり、キャンデイを渡したと思ってしまうのだ。この反応は脈なしといつていいだろう。応援する体勢にはいている。

「太一に聞いても教えてくれないんですよね。昨日怒って電話切られちゃって」

そりや怒られるわよ、空ちゃん。片思い相手になんて話題ふっかけるの。知らないとはいえ、その事態を招いてしまったジューンは罪悪感が山積していく。いたたまれない。こんな空気の中連携とらないといけないとか普通にきつい。せめて、せめてフォローしなくては、とジューンは言葉を紡ぐ。

「私は相談に乗っただけよ、相談」

「え、相談ですか？」

「うん、そう。好きな子に誕生日プレゼントあげたいんだけど、なにがいいかなって。文房具とかいろいろ考えてはあげたけど、やっぱり一番は自分で考えた方がいいって教えてあげたわ。素直に伝えられないなら手紙にしたらってね」

たんなる相談相手だとアピールするつもりで言ったのだが、空はくすくす笑い始めた。

「空ちゃん？」

「ジューンさんってほんとに大人の駆け引きって感じですね。だから太一、あんなこといつてたんだ、ふふ」

振り回されてる太一っておもしろくて、と残酷すぎる言葉が聞こえてしまい、うわー、とジューンは心の中で叫ぶ。どうしてそっち方面に受け止めてしまうのだろう、空ちゃん

は！

「いや、だからね？私は相談にのっただけよ？」

「そうですよね。うん、ジュンさんは相談に、ふふっ」

なにやらツボに入ってしまったらしい。涙すら浮かんできた空は、恋愛話にテンションがあがるミミのように意気揚々としている。とりあえずこちらが太一に気がないとアピールできただけいいとしよう。

「あ、ジュンさん。こんなときくらい、パソコンはなしですよ」

「えっ」

太一編4

「……だーもう、どうすりゃいいんだよ！」

太一は悩んでいた。それはもう悩んでいた。下手をしたらテスト勉強以上に頭を悩ませていた。ジュンから宿題を出されて、もうすぐ三週間だ。ジュンからの反応はどうとらえたらいいのか、太一は正直わからないでいる。

はぐらかされているのか、遠回しに脈なしだといわれているのか、ぐちゃぐちゃ考えるのは正直得意じゃない。ジュンが素直になれないなら手紙でも書けといったのだ、たしかに口に出すには気恥ずかしいけど、いざ文字に起こすのもまた結構な羞恥を伴う作業だと太一は初めて気づいた。

パソコンを前にして、あーとかうーとか言いながらうなっている太一の横から伸びてくる手がある。

「何書いてるの？メール？」

「うわあっ!? な、なんだよ、光って見るなよ！」

あわてて×ボタンを連打する。

「なんで隠すの？」

「なんでもねーよ！」

「？変なお兄ちゃん」

ピンクのワンピースを着ている光はどこかに遊びに行くようだ。

「どっか行くのか？」

「うん、今日みっちゃんの誕生日だから。これプレゼント」

「あー、あんとき買ってたやつ？」

「うん。お兄ちゃんはまだなの？」

「なにが？」

「ジュンさんの誕生日プレゼント。まだいーだろって買わなかったけど、もう買った？」

「うっせえ、こつちだっていろいろ考えてんだよ」

「ほんと？ホワイトデーの時みたいにマシユマロ買おうとしてない？」

「だーから、あげるお菓子に意味があるとか、そんなの知るかよ！そこんところは感謝して

るけどさー」

「ジュンさんなんて？」

「おいしかったってさ」

「え、それだけ？」

小学校3年生になった光はちよつとだけ大人になった。ミミがそういったドラマとか、漫画とか大好きで、ジユンも友達の影響か結構詳しくて、そういうのを貸してもらえようになつたのもある。お兄ちゃん子だつた光はその漫画を読んだりアニメをみたりすることはあつても、女の子向けのジャンルを見る機会は以外と無かつた。

空はあんまりそういうの好きじゃないし。ミミの布教活動はそりやもう熱心だつた。女の子なんだからもつとかわいいを楽しまなきや、とシンプルな動きやすい服ばかりな光を面白い物に連れ出した。インドア派なジユンは百恵が増えたとて嘆いていたけれど、光の周りにはいろんなタイプのお姉さんが一気に増えてしまったのだ。

好きなものも、ジャンルも、なにもかも違うのに、デジモンという共通点で結ばれている、そんな不思議なお友達がたくさんできた。しかも空がサッカーをやめて、お母さんの手ほどきを受けて華道を習い始めた。講座発表会にお邪魔したら、綺麗な着物を着てお茶を点でていた。正直どきどきした。

みんな、変わっていく。なら、私もちよつと変わりたい。そう思った。だからピンク色のワンピースを着ているのだ。今までの光だつたら、あんまりこういうのに興味は示さなかつたから、お母さんはちよつとうれしそうだつたりする。

うーんうーんうなっている太一の横を隙ありとばかりにのぞき込む。買ったばかりのお気に入りを入れを翻し、光はパソコンの横に立つ。うわつと大げさに驚いている太一の横

で、マウスを操作する。

「はい、送信」

「うわあつ!? ちよ、何してんだよ、光!」

「お兄ちゃん送るんでしょ?」

「そーだけどさー」

送信完了の文字に太一はどうしようとするし始める。らしくないがたくさん見られて、これはこれで楽しかったりするのだ。光は。あのメールだって、みんなでお祝いすることになっていいるから、それとはまた別にどっか行こうと誘うメールだったのだ。

想いを伝える言葉はひとつもないのに、ここまで太一は悩んでいる。あの太一がだ。帰ってくる頃にはなんかあつたらいいなと思う。光のちよつと違う普通じゃない体質について告白されたとき、大輔みたいねといいながらあつさり受け入れてくれたジユンである。

怖いと泣きじゃくるたびに何一つ否定されず、抱きしめてくれたお姉ちゃんがいる。同級生の男の子がとてもうらやましくなってしまうくらいには、光はジユンに好感を抱いている。

「いつてきまーす」

お兄ちゃんを置き去りにして、ちゃっかりとした妹は出かけてしまったのだった。

買い物を楽しんでいた空とジュンは、近くのフードコートで休憩していた。値札は適正な価格なのに、レジで表示された値段が百万単位という訳の分からない事故に巻き込まれた。どこをどう見ても故障ということ、手動でレジの人は対処してくれた。なにかあったのかな、と二人で話していたフードコートで、着信が鳴り響く。

電子音声のあと、太一の声が聞こえてくる。思わず立ち上がったジュンは音が漏れなように抱えたまま、空に手招きする。きよとんとしたまま近くに寄ってきた空に、ジュンは真剣なまなざしを向けた。

「光子郎君から電話だわ。こっちのネットに新種のデジモンが現れたんですって！」

「えっ?!それほんとですか?」

「ええ、連絡いれろって言ってる。ね、空ちゃん、デジヴァイス……」

「もちろん、ありますよ!」

空はうなずいた。2月28日という、たった5日前にデジモンが原因の電子機器の故障ではないか、と疑われる事象があったばかりなのだ。みんな念のためデジヴァイスを持ち歩き、ゲンナイさんからお墨付きをもらったあと念のためと持ち歩いていたらし

い。

さすがね、と笑ったジューンは周囲を見渡す。ここは人が多すぎる。せめて人目のつかないところ、とぎつと周囲を確認し、近くに公園があったので、二人はそつちに向かった。

ウォーキングなどにいそしむ近隣住民しかいないところである。お昼休みだからか、コンビニの袋を下げた社会人がご飯を食べている。なるべく木々が多いところを探し、ジューンはパソコンを広げた。無線ルーターに接続し、ゲンナイさんの隠れ家にアクセスを試みる。

「空ちゃん、太一君の家に電話掛けてくれる？最初に1771つけて」

「1771ですか？」

「ええ、1771。今新種のデジモンのせいでISDNがつながりにくくなってるみたい。お台場霧事件とか先の震災とか、あの地下の事件とか、電話がつながりにくくなったときに大活躍したシステムなのよ。留守電をお互いに登録しあえるの。私と一緒にいるって伝えて」

「はい、わかりました」

うなずいた空はサッカークラブにいたとき、何度だつて掛けた電話を掛けるのだ。

『ほっほっほ、さっそく来てくれたようじゃのう。待つておつたぞ、ジューン』

「大変なことになってるみたいですね。もしかして、28日の？」

『あのときは発見できなかったんじゃないか』

「こつちの世界はすごい勢いでネットが普及してますから……」

『すまんのう』

「いえ、気にしないでください。それよりゲンナイさんは大丈夫なんですか？ まだ暗黒の球……」

老人姿のゲンナイにジュンは心配そうな顔をする。ゲンナイが老人の姿なのはダークマスターズに埋め込まれた暗黒の球を除去する作業中だからだ。彼の本来の姿は青年である。ホメオスタシスの手足となるエージェント唯一の生き残りであるゲンナイは、そのデータを複製することで本来の仕事を開始して果たすことができるはずなのに、まだその段階ではないと言われているも同然だ。

ゲンナイのデータが正常になるまえに複製することはなんの意味もなさない。きつと新種デジモンの発見の遅れも、そのせいなのだ。ひょうひょうとした笑いを引つ込め、ゲンナイは肩をすくめた。そしてその白いひげをいじる。困らせてしまっただろうか。ま、たしかに本来なら太一達は知り得ない情報だったから仕方ない。

『ジュンには敵わないな。すまないが、全くもってその通りなんだ。あのデジモンは、デジタルモンスターの原種にとっても近い性質をしていてね』

「コンピュータウイルスってことですか」

『理解が早くて助かるよ。まさしくそうだ。自己複製機能に加えて、デジゲノムを変化させて環境に適応し、すさまじい速さでデータに感染していく。生まれた意味、あのデジモンの場合は、制作者の意図、それを存在理由にしている』

「クラッカーの意図なんて愉快犯じゃないじゃないですか」

『ああ、困ったことだね。我々はどんなデジモンも許容するさ、世界を崩壊させかねない因子を持たない限りはね。ただ私たちは君たちと共存の道を選ぶために模索中なんだ。あのデジモンは現実世界にとつても、我々の未来にとつてもよくない。せめてデジタルワールドに来てもらわなければ困るんだ。頼めるかい？』

「はい、わかりました」

『今、奴は太一と交戦中だ。相手のデータを取り込んでどんどん強くなってる。完全体相当だ』

「えっ、もう完全体ですか!?!しかも学習しながらって、そんなの上から殴って速攻で決着つけないとやばいじゃないですか!」

『ああ、異常事態だ。頼むよ、ジューン』

「わかりました!」

ジューンのパソコンに、結界から行動することができないゲンナイの代わりとなるネッ

トワークセキュリティの権限が一時的に譲渡される。デジタルゲートを操作するプログラムが展開する。

「ジュンさん、太一と連絡取れました。今、遊園地の管理システムの中にいるって!」
「遊園地い!?!それほんと!?!あーもう、死傷者出たらどうしてくれんのよ!空ちゃん、こつちがサポートするから光子郎君にもネットに行つてって伝えてくれる?デジタルゲート開くから!」

去年の大晦日の大冒険で一度はとった連携だ。なにをしようとしているのか、空は分かつたらしい。ジュンのパソコンの向こうで、空ー!と名前を呼んでくれるパートナーを確認した空はデジヴァイスを手にする。そしてPHSに話し始める。

選ばれし子供とパートナーデジモンはその性質上、離れてしまうと戦力が大きく削がれてしまう。しかしネットの中の戦いはナビゲートが必須だ。きっと太一やヤマト、タケルはすでにネットの中だが、光子郎は太一の部屋だろう。

「あ、ジュンさん」

「なに?」

「掲示板のサーバ?ってというのが重くなりすぎて、えーっと、レスポンス?ってというのが下がってるらしいです。任せたって」

「はああっ!? そんなの 一時的に凍結すればいいじゃない」

「あのデジモンの同行、 見てる子達から情報入ってるから切るに切れないらしくて」

「うっそでしょー、 サポートとサーバの管理同時並行とか普通に死ねるわよ! あーもう、 ゲンナイさあん!」

『このログは残しておいてくれないかい?』

「まつじですか!?! わかつたわよーっ! やつてやろうじゃない。 今更太一君達が私のパソコンから入るなんて非効率すぎるもんね、 この野郎、 ただじやおかないわよ!」

デジタルゲートを開きながら、 ジュンは空が一番近くのネット回線に入り込むのを確認する。 一時的に回線は重くなるが、 世界の危機なのだ。 我慢して欲しい。 ゲンナイの回線から飛び込んできたピヨモンが、 どうすればいいか聞いてくる。

「ここで一気に進化しちゃつて! 交戦中のところに成長期で飛び込むのはあぶないわ。 一気に転送するから!」

『わかりました。 いくわよ、 ピヨモン!』

『うん!』

光子郎の放置されているであろうパソコンにハッキングを仕掛け、 一時的に権限を譲渡する作業を同時並行で行い、 ジュンはその光景を別画面で見守る。 大晦日のミレニアモンの奇襲により、 ダークマスターズのいた時代に飛ばされ、 丈と共に究極体を頂点と

する完全体の軍隊相手に完全体2体で応戦を強いられた空とピヨモンは確実に成長している。ジュンの目の前で、ピヨモンはバードラモン、ガルダモンをすつ飛ばし、さらなる姿に成長を遂げる。

黄金色に輝く4枚の羽を持った聖なるデジモンが咆哮する。空が騎乗していることを確認し、ジュンは空を転送した。そしてジュンもその画面を見る。

ホウオウモンの光来と共に周囲にまばゆい光が四散する。ウィルスの性質を一気に最適化する光により、妨害目的だろうか、周囲に漂っていた新型デジモンのクローン体は一気に消える。

『空ー！』

『空さん！』

『来てくれたんですね！』

『待ってたぞ』

『待たせてゴメンね、みんな！』

「ここからは私がサポートするわ！みんな、よろしく頼むわよ」

返事が聞こえる。どこかほっとした様子の太一だが、さすがにそこに気づけるほどの状況にジュンはない。太一からすればメールがまさかの拒否、シヨックだったが大輔に電話を掛けたらジュンは出かけたという。

P H S に掛けたら空が出た。残念でした、と茶化されたときは電話機を叩きつけたくなったが堪えたのだ。昨日だって好奇心からいろいろ聞いてきたのだ、空は。ジュンがちゃんと来てくれた。今まで応戦してくれたみんなにねぎらいを投げる。

「頼むわよ、太一君。アイツはすさまじい速度で経験値を詰んでるわ。手に負えなくなる前に、お願い」

『へへっ、任せとけよ！』

ゴーグルを付けなおした太一は、うれしそうにうなずいた。

「太一くん、どうしたの？」

「どうしたもこうしたもないだろ！今日はジュンさんの誕生日だろ！」

「え？ああ、そうだけど？」

「これ」

「もしかしてくれるの？ありがと」

「お、おう」

「でもいいのー？結構可愛いラッピングじゃない。他に渡すべき人がいるんじゃないの？」

「はあ？何言ってるんだよ、ジュンさん」

「またまたー、この前からかわれたからって、隠さなくつてもいいじゃない。空ちゃんに渡すんでしょ？」

「はあっ!?なんで空が出てくるんだよ！別に俺と空はそういうんじゃないし、俺は空のこと、そういうふうには思っていない！だいたい、空に誕生日は夏だったの！なんでまだまだ先の誕生日プレゼントを渡さなくっちゃいけないんだよ！」

「え？」

「え？」

一乗寺治編

「ジュンさん」

「え？どうしたのよ、治くん。改まって」

「お疲れ様」

「あー…… うん、まあね。高校に進学できないなんて事態にならなくて良かったわ」

ジュンはどこか疲れたように笑った。

この世界に帰ってきた感動を噛み締める暇など高校受験という現実を前にしたときないも同然だった。推薦入試期間はどうにすぎた。しかも私立の一般入試も願書の提出日が過ぎていた時点でジュンは最後の望みをかけて前期は公立の高校の一般入試に挑まなければならなかった。第一志望だった高専は帰還できた日がバレンタインデーだった時点で、どうあがいても滑り止めや第二、三志望に進路を定めなければならなかった。どうにもならなかったのである。この時点で私立や公立の後期入試まで視野に入れて頑張るはめになったジュンは合格発表頃にはもえつきてしまった。

そういうわけでジュンは凶らずも親友である百恵と同じ公立の高校に進学することになったのだった。

「まあ、工業大学に進学すればやりたいことはできるしね」

「編入しないのか？」

「編入ねえ……しばらく進路のことは考えたくないから頭の片隅にでもおいとくわあはは」

はあ。出てくるのはため息ばかりだ。治は同情せざるをえないのである。デジモンが存在が表沙汰にできない時点で、ジュンの行方不明の説明がつかないのだ。

現実世界においてはまだ中学三年生の15歳でしかないジュンは、受験によるストレスで50日間ほど出奔したということになってしまった。授業自体は受験生の三学期のため殆ど自習だったため。成績優秀者だったジュンは登校を免除されていたのでことなきをえた。

久しぶりに学校に登校するなり両親と共に担任と校長に謝り倒したジュンである。病院に担ぎ込まれて緊急入院していたことは知らされていた大人たちは、ジュンがすさまじいストレスをかかえていたのではないかと考えたらしく、逆にまだ諦めるなど気を遣われてしまった。特にパソコン部の顧問は期待をかけすぎてしまった自分の責任ではないかと謝罪されてしまい、ジュンは困ってしまった。

下手に説明したらややこしいことになるため、ジュンはストレスに負けて出奔したことになってしまった。これは一生付きまとう事実となる。いずれデジモンの存在が明

かされたらジュンの事情を話せる時がくるが、今はもうどうしようもない。パソコン部の仲間やクラスメイトに気を遣われてしまったり。色々言われたり。不慣れな注目を浴びてしまっているジュンはすっかり気疲れしているようだった。

「噂は75日っていうし、我慢するしかないさ」

「まー、そうなんだけどね…… 治くんも大概じゃないの」

「ジュンさんと違って行方不明じゃなかったからな、致命傷にはならなかったよ」

バレンタインデーになるまで暗黒の球体を体を持ったままだった治は、時限爆弾をかかえたまま推薦入試に挑んでいた。

「すごい度胸だわ……」

「クロックモンさえてくれたら、あとはデジヴァイスの結界でなんとかあったしな」

「デジタル時計っていいはって？」

「そうさ。ディーターミナルはさすがにパソコンと見なされてダメだったから、クロックモンには受験会場のネットワークから待機してもらってた」

「よく結界がバレなかったわね」

「規模の操作ができるようゲンナイさんがプログラムを追加してくれたんだ」

「それでもよ」

「試験が始まればこつちのものだったさ。集中すればジュンさんたちのこと考えなくて

済んでたからね」

「あはは……」

「お互い進学出来て良かったな」

「ほんとにね」

うんうん、ジューンはうなずいた。

「問題は行方不明事件なのよね……あ……その、遼くんどんな感じ？」

治は静かに笑った。

「あつ……やっぱそっちでも噂になってんのね……」

「そりやそうさ。同時期に行方不明者になった2人は友達だった。帰って来た日も同じ、しかもバレンタインデーだぞ。僕だって疑うよ」

「そうよね……学校も違うのに普通に仲良くしてたもんね、アタシたち。目撃者はたくさんいるかア……」

「遼が僕とジューンさんのことをあることないこと学校で騒ぎたててたから自業自得なところあるけどな」

「えっ、なにそれ、初耳なんですけど」

「おかげで僕がエスカレーターを蹴って外部受験したことまで余計な勘ぐりされて同情されまくってるよ。遼は持ち上がりだから居た堪れないだろうな」

「うわあ…… 大惨事じゃないの」

「僕達を置いていった罰だ。これくらいで済んで感謝してもらいたいくらいだな」

「ほんとその件に関しましてはご迷惑をおかけしました」

「いや、ジュンさんはいいんだよ。悪いのはデーモンなんだから」

「まあ、そうなんですけど…… だってすっごいいい笑顔なんだもの。治くん。怖いわよ」

治は目を細めて笑った。

「僕がジュンさんと同じ進路を辿ったら大騒ぎになりそうだな」

「いよいよ三角関係に終止符が!? って感じで周りがわくわくしちゃうパターンじゃないの。百恵あたりが知ったらえらいことになるわね」

「工業大学行くんだろ、ジュンさん？」

「そうよ。まあ、治くんも似たような進路よね」

「もちろん」

「あはは…… アタシでもできる未来予知がうかんだわ。たぶん的中率100パーセントの」

ジュンはうんざりとした様子で肩を竦めた。

「仕方ないさ。たっぷりとした情報の水源も、野次馬のところまで下りてくるころには、

ぼつんぼつんという滴りみたいなものになってるんだから。好き勝手に想像するしかないんだ」

「まーそうなんだけどね」

ジュンは躊躇いがちに治をみた。

「怒ってるわよね、治くん」

「遼には怒ってるさ」

「アタシにも思うところはあるんでしょ？いつもの治くんだったら、そんな噂話かき消してくれるのに放置してるんだし」

「まあ、否定はしないよ」

「うん、そうよね」

「聞いたって凹むのか、ジュンさん」

「凹まなきやいけない時期なのよ、やっとこさ受験から解放されたんだから」

「それもそうか」

「悲しみも怒りも洗いざらい吐き出した方がいいのは経験上わかってはいるんだけどどうにもね、時間が経ちすぎちゃって。時間薬の効果が高すぎるわ」

ジュンは浮かかない顔だ。

「タイチたちのいたデジタルワールドは時間の流れが違ったからな」

「まさか50日しかたつてないとは思わなかったのよ。あっちじや4年たつてたんだもの」

「ジュンさん的にはもう18歳のつもりが14歳のままだしな。無理もないか」

「まあね」

「まあ、話したくなったら話せばいいさ。誰もまだジュンさんを探すために渡つたいくつもの平行世界について話すつもりはないみたいだし、お互いさまだ」

「うん、そういつてくれると嬉しい。気が楽になつたわ。ありがとう」

「ただ」

「ただ？」

「サマーメモリーズで本当はなにがあつたのか、大輔くんには話した方がいいと思う」

「………… やつぱり？」

「ああ。大輔くんはパラレルモンに掴まつたとき、どうやらサマーメモリーズでジュンさんがデジタルワールドに連れ去られたあとになにがあつたのか見たようだからな」

「…………… 嘘でしょ」

「嘘じゃないさ」

「でも大輔はそんなこと一言も」

「言わないだけで待つてるんだよ。選ばれる前からそうだっただろ。いつも肝心なことは教えてくれないと愚痴りながらも待つてるじゃないか、君の弟は」

「……………」

死刑囚が心の内の泥のような言葉を吐く寸前の顔をしているジュンに治はしばしの沈黙を選んだ。

「まだ」

「まだ言えない？」

「まだダメよ、早すぎるわ。大輔まだ9歳なのに」

「あんな大冒険を僕らと成し遂げたのに？」

「それでもよ」

治は息を吐いた。

「忘れてるのかもしれないが、大輔くんも僕らと一緒に平行世界を渡り歩いたんだぞ、ジュンさん」

「…………… あっ」

「そう、そうさ。大輔くんは気づいてるはずだ。見たんだから。その目で。たくさんの平行世界の中で君が今の君であるのは僕らの世界だけなんだと」

ジュンは血の気がひいた。

「みんなは平行世界だから、ですんぞ。でも大輔くんはサマーメモリーズでジュンさんがデジタルワールドに誘拐されたことが原因だと気づいてる」

そして唾を飲み込んだ。

「どの世界でもパートナーデジモンや出会った時期は同じだったのに、僕らの世界のジュンさんだけが違うんだ」

どの世界でも大輔の6つ年上の姉たる本宮ジュンは、ヴァンデモンのお台場襲撃の際、ヴァンデモンに捕らわれた子供の一人だった。いつもパンク系のファッションをしており、テンションの高い性格。行く先々で大輔の悪口を言っているが、険悪な関係ではない。

ヤマトに片思いしていたが空と付き合っていることを知り失恋。2002年12月26日以降はシユウに惚れる。しかし、ヤマトのファンであることは止めていなかったよう、その後も彼女の携帯電話にはヤマトのストラップがついている。2003年の春にパートナーデジモンが現れている。

それはデジタルワールドの冒険に示された本宮ジュンであり、小学校4年生までの本宮ジュンそのものである。

「話さない方が大輔くんを傷つけてるよ、ジュンさん」

ジュンは小さく首を降った。

「大輔だったらなんでよりによって治くんに話すのよ……」

「僕がいった方がジュンさんが話してくれると思っただけだ。それに僕は口が堅いからな」

「まあ、治くんの追及から逃れられる気がしないから当たってるけどね、あーもう」

諦めたようにジュンは笑った。

「どうせ聞いてるんでしょ、大輔」

「もちろん」

治はしれつとポケットから携帯電話を取り出した。受け取ったジュンは耳を押し当ててる。

「今どこよ、大輔。出てきなさい、全部教えてあげるから」

しばらくして、今にも泣きそうな顔をしている大輔が茂みの向こうから出てきたのだった。ベンチに座ったジュンは大輔を隣に座らせる。

「じゃあ僕はそろそろ……」

「治さん……」

「えええ、待つてよ大輔。本気？」

「姉ちゃん、絶対どつかで嘘つくからやだ」

「だからごめんて」

「わかった」

「まじすか…… うわあ」

「この場に及んで目が泳いでるからな、往生際が悪い。観念させるために僕からいこうか」

「お願いしまーす」

「軽っ…… 大輔軽いわね、あんた!?いつからそんなに仲良くなったのよ」

「50日もあれば仲良くなるさ」

「ぐっ…… それ言われるとなにもいい返せない……」

治はすぐ横のベンチに座った。

「僕たちはいろんな平行世界を回ったのは話したよな」

「ええ、そうね」

「結論からいうと僕が2001年を迎えられたのはこの世界だけだった」

「えっ…… なによそれ」

「事実だから仕方ないだろ。あと、ミレニアモンが生まれた世界は賢が一人っ子だとかだった。あとはすべてミレニアモンが介入した世界だった。共通点としては賢がミレニアモンから太一くんや遼をかばって暗黒の球体を埋め込まれてゲンナイさんと連絡がとれない間にミレニアモンから干渉をうけてミレニアモンを生成しようとして大輔

くんたちに止められていた。引き金は色々あるが遼の失踪と僕の事故死が同じ時期だったこと。葬式に来た父さんの同僚である及川さんがヴァンデモンに精神を乗っ取られていたことからはじまつてる」

治はジユンをみた。

「ジユンさんが可能性の芽をぜんぶ潰してくれたから、僕は今ここにいるんだと確信してる。ミレニアモンはオリジナル世界の自分の意思でミレニアモンを作って時空を超えて遼を助けようとした賢をふたたび作り出そうとしていたんだ。ジユンさんがいなかったら、僕達は太一君たちと繋がれなかった。きつとベンジャミンさんを通して誘導してたミレニアモンの罠にはまっていたはずだった。ベンジャミンさんの不審な行動に気づいてくれたジユンさんのおかげだよ」

ありがとう、の言葉にジユンは困った顔をしている。

「偶然だと思っただけど……」

「ベンジャミンさんに不審感を抱いていたのはジユンさんじゃないか。」

「交通事故が偶然じゃない気がするから気をつけろといったのは君だよ」

「そりゃそうだけど……」

「姉ちゃん、そんなこといつてたのかよ！」

「そうだよ。ジユンさんがゲンナイさんと一緒にいるよう僕と賢に取り計らったり、交

流を頻繁にしたりしたのには心配だったからさ。君が心配してるようなことじゃない」

「えっ……… ちよつと大輔？」

「だって………」

「それはあとにしよう、大輔くん。あらためて聞きたいんだけど、ジュンさん。君のサポートはいつもの確だよな？それは君だけの技術なのか？君の精神がなんからの変化をしてないか？そうじゃないと平行世界の本宮ジュンと全く違う形でパートナーデジモンが現れるわけがないし、はるか未来からわざわざガーゴモンが会いに来るわけがないと思うんだ」

理詰めで大手をさされたジュンは白旗をあげるしかなかった。

「降参よ、降参。わかったわ、話してあげる。アタシの正体について」

「姉ちゃん………」

「まずは謝らなきゃいけないわね、大輔。この世界の本宮ジュンは1999年3月4日のサマーメモリーズの事件で精神的なショックをうけて死にかけたのよ」

「!!」

「デジタルワールドはなんとか植物状態に陥った本宮ジュンを助けようとして、ネットワーク上にある本宮ジュンというパーソナルデータをかき集めて精神データを修復しようとしたの。そこでトラブルが発生したわ」

「もしかして、未来からミレニアモンたちが攻めてきた？」

「やだ、そこまで見たの？」

「ベムモンたちがゲンナイさんたちの前のエージェントたちを……」

「あー、なるほど。そこを見ちゃったのか……。そうよ、混乱に乗じて精神データに異物が混入したのに気づかないまま、デジタルワールドは本宮ジュンを現実世界に戻してゲートを閉じたのよ。ベムモンたちは四聖獣たちに倒されたけど」

「異物って？」

「それがアタシよ。20××年を生きてた、アタシ」

治と大輔は目を見合わせた。

「君は一体？」

「未来のオレがもう姉ちゃんは亡くなってるって……」

「あー、そっか。ミレニアモンは未来から侵攻してきたんだっけ？なら当然未来世界にもいったのね、大輔……。そりやそうよ。本宮ジュンとアタシは同じ時間軸にはいないわ。魂が同じなんだから」

その言葉に治と大輔はいよいよ沈黙してしまう。

「アタシはね、デジタルワールドのセキュリティシステムの下請けプログラマーをしていたの。そしてベムモンのデジタマがデジ研を誇るミレニアモンによつてばらまかれ

て引き起こされたデジタルクライシスの被害者になるはずが、どうやらアポカリモンの本体に目をつけられたみたいだね」

「やっぱり……」

「やっぱりつてことは、聞いてるのね未来の大輔に」

2人はうなずいた。

「あつちだと2027年に暗黒勢力との戦いに終止符が打たれたんだ。そのとき、犠牲も少なからずあつた」

「そのひとりが本宮ジュンだったわけね」

「そのとき、暗黒勢力の力をもろに受けたらしい」

「そうなの」

「未来の僕をかばって……」

「あちやー…… アタシとやってること同じじゃないの」

大輔はいよいよジュンにしがみついて離れなくなってしまう。

「あーもう、泣かないでよ大輔。もう全部終わったんだから。ね?」

「無茶いうなよ、ジュンさん。大輔くんからしたら、1995年に本来のジュンさんは大輔くんを庇って死んだんだぞ。しかも君もやることは基本変わらないんだから。甘んじて受けるべきだ」

「いつにもまして辛辣じゃないの、治くん」

「僕だけじゃないんだ。受験が終わった今、みんな我慢してたんだからな。覚悟した方がいい」

「…… あはは」

ジュンはため息をつくしかない。

「というわけで、噂を沈静化するつもりは無いからな。遠がどう思ってるのかは知らないが、僕にとっては事実だから」

「…… えっ、ちょっと待ってよ治くん。どさくさに紛れてなにいつてるの」

治は意味深に笑った。